

ホームページ

記憶の場面

中央図書館事務部 中尾民子

私が中央図書館に配属されて以来、40年余りの歳月を振り返ってみると、それはそのまま近畿大学中央図書館の変遷であり、利用者へのサービスの変遷なのではないかと思われれます。不確かな点もあるかとは思いますが、ちょっと記憶の場面を繋いでみましょう。

出勤一日目は、掲示もあまりない広い館内、どこに何が配置されているのか解らないままに終わりました。朝の掃除に始まり、書架整備、カウンターでの貸出・返却の手続き、書庫の図書の出納、コピーの受付・複写・引き渡し、コピー料金出納など、特にカウンターは、学生の休憩時間は目の回るような忙しさでした。

閲覧課に配属された昭和46年頃、図書館に対する一般的なイメージは、資料と場所の提供であり、立派な建物、多くの資料収集、収容力のある書庫、重厚な雰囲気のある閲覧室、図書の貸出可能であることなどが図書館の要素になっていました。本図書館もそれらの要素を満たすべくその途上にありました。サービスはといえば、殆ど一方的に図書館側の都合に合わせるのが当たり前のような雰囲気でした。

図書を借りたい時は、1冊ごとに貸出票に必要事項（貸出日、返却期日、学籍、住所、氏名、図書請求記号、原簿番号、書名、著者名など）を記入して、図書と本人の貸出カードを添えてカウンターに提出して、係員が図書と記載事項を照合して、本人用の貸出カードに請求記号を記入し返却期日印を押す、これで貸出手続き完了となりました。図書を3冊借りる時は、貸出票も3枚記入しなければなりませんだったので、昼の休憩時間になると、手続きの学生でカウンターに長蛇の列ができました。

また、二部の授業が21時過ぎまで有るにもかかわらず、開館時間は9時30分から20時30分まで、貸出手続きは20時まででした。書庫には古い本が一杯納まっていましたが、書庫に入庫できるのは、教職員と院生に限られていたため、書庫の図書を閲覧したい学生は、閲覧希望用紙にタイトルを記入して請求し、係員に持ってきてもらいました。

このころ、黒い布で足首まで入る靴カバーなるものがあり、雨の日は入口でそれを履いて入館することになっていましたが、さすがにそれは、数か月で廃止になりました。入館時の学生証の撮影チェックなど、まだ学生運動も盛んであり、本学関係者以外の入館には特に気を使っていたようです。また、新館ができて早々という事もあったかもしれませんが、掲示物についても、貼ることは許可されることが少なく、そのため、2～M9階に通じる館内の業務用のリフトは、各階の表示が乏しく、館員でも解りにくいことが多かったように思います。

図書の貸出自体がサービスそのものであり、“本を貸出ししてあげますよ”的な図書館の時代でありました。

当時は、書架で図書を探す手間（図書の配列は請求記号上2桁、3桁など）、目録カードを調べる手間（和書のヘディングの不備など）、図書を借りる手間（貸出票記入）、入館時のチェック（学生証の撮影）など、手続きの煩わしさが図書館利用の大きなネックになっていました。この後10年を経て入館、貸出・返却業務などが、パソコン利用で機械化され、さらに蔵書管理システムとして稼働していくこととなります。

1974年、洋書整理係に配属になり、AACR2、LCの冊子目録を参考にしながら、ひたすら英文タイプライターでの洋書目録作成、手作業で年度末刊行の洋書増加目録の作成などをお

こないました。1980年には閲覧課参考業務担当（1980年新設）に配属になり、図書館5階の小部屋（現在の書庫入庫受付口）で、院生・教職員の入館・貸出・返却、相互協力、オンライン文献情報検索を担当することになりました。

本学図書館の利用者サービスの変化は、相互協力による文献複写取寄せ・図書貸借などの業務の開始と、Telnet接続によるオンライン文献情報検索「Dialog」サービスの開始、この2点に現れていると思われます。図書を貸し出すから、より踏み込んだサービスへと図書館サービスは大きな展開を見せていくことになります。

相互利用の文献複写も、開設となると、様々な問題に遭遇し、試行錯誤が続きましたが、学外からの依頼の件数も増加していきました。

オンライン情報検索サービスは、利用に求められた教員とのキーワードの確認や、参考の情報を伺いながら、端末機でオンライン検索を行いました。接続が上手く行かない時も多々ありました。開始後しばらくは、利用料金は大学負担であったので、理工学部、薬学、教養学部の先生の利用が多く、自分の論文が他の研究や論文と被らないかなど、確認のための検索でもあり、検索漏れがないかなど緊張しました。

この二つのサービス業務開始で得た経験は、私にとって強い刺激であり、以後の図書館業務を考える上で大いに役立ちました。

図書館の改造計画として、図書館システムの電算化は1992年に5カ年で着手することになりました。IBMの図書館パッケージソフトDOBIS/Eを導入し、1993年2月には、学術情報センターの目録所在情報サービス（NACSIS-CAT）、情報検索サービス（NACSIS-IR）登録し、所蔵資料のDOBISへの搭載処理を開始しました。館員一丸となって、データの入力、整備に努めました。1993年10月に公開し、貸出・返却、目録処理などから、全般の機械化へと進みました。

図書目録検索システムは「KISS」、1年遅くスタートした雑誌検索システムは、「KISS²」という愛称で呼ばれ、閲覧室に端末機が並びました。今から20年前のことなので、パソコンに不慣れな方も多く、DOBIS自体扱いにくいシステムだったこともあり、検索講習会を度々開催し、検索マニュアルの1枚ものや詳しい冊子体もそばに置きました。

1997年には、図書館の大改装が完了し、ほぼ今の館内図のようになりました。現在使用している4階から5階閲覧室への内階段を取付けて、閲覧室を3・4・5階と利用しやすいように、広くしました。6階には自学自習のための自由閲覧室を設けました。入退館は3階で、3～5階で図書、雑誌が閲覧でき、学生は書庫に10時から19時まで入室できることになりました。この時期、文部省の要項にも、利用者サービス、利用者教育が取り上げられていたので、当館もそれをきっかけに、設備、サービス面での充実にもむけて進んできました。書架も木製書架から使いやすいスチール書架に新装になりました。

インターネットの急速な普及で、サーチエンジンの説明や、検索の仕方などの、講習会も開催しました。教えながら、自分が勉強し、CD-ROMの検索指導も、教え、教えられ、共に学ぶことを身にしみて感じました。

2002年、富士通のiLiswaveの導入により、蔵書検索が極端にやり易くなり、サービス開始の2003年4月、新しい端末機の前に坐った学生はなんのためらいもなく、蔵書検索を始め、すぐに、書架の方へ本を探しに行き、次々坐った学生が、楽しそうに、検索していたのが印象的でした。

2009年E-Cats導入で、近畿大学の他キャンパスとのシステム統合、図書の物流、Myライブラリーの機能など、システムの便利さと共に設備面も改良され、施設面での制約はあるが、開館時間なども含め、ずいぶん利用し易い図書館に変貌しました。使用できるデータベース、電子ジャーナルなども年々増加し、利用ガイダンスも数多く開催され、上手に使

いこなしてもらえ図書館になりつつあります。

記憶の場面がなかなか繋がりにくく、ひとりよがりの場面の連続かもしれません。40年の業務での私個人の力は微々たるものですが、とにかく、その時にできることをし、次の段階に進んでいく、進めば解らないから勉強する、その積み重ねだったのだと思います。検討中の図書館の新館構想については、次々と新たな検討事項が湧いてくるとは思います、図書館は利用者と、館員の協同の場であって欲しいと願っています。



3階 閲覧室受付



3階 カードケース

写真は『近畿大学中央図書館』昭和45（1970）年発行より抜粋。